
IS インフィニット・ストラトス/セカンド・ライフ

よしおか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス/セカンド・ライフ

【Nコード】

N9368Y

【作者名】

よしおか

【あらすじ】

初連載です。転生ものが書きたくて書いた、後悔はしていません。いえ、ちょっとばかりしています。

この作品には転生キャラクターが多数出演しており、原作とは話の流れが異なっております。ご注意ください。 12/5 キーワードを追加しました。

はじめに

注意！！

この作品はインフィニット・ストラトスの二次創作であり、以下の要素が含まれます。「そんなの絶対おかしいよ！」という方はブラウザを閉じる事をお勧めいたしますが、それでも読んで下さると作者が小躍りして喜びます。

- ・弱チート持ちオリ主達のテンプレ転生もの。

- ・作者がファース党（ことライトノベルに関しては『最初に物語に登場したヒロイン』至上主義者であり、その上『幼馴染ヒロイン』大好き）。

- ・よって恐らくほぼ確定と言って良いレベルでのいっくん×篝ちゃん描写が多数。

- ・しかしワンサマーハーレムは三巻辺りまで健在。

- ・織斑姉弟が原作よりも仲が悪い。

- ・オリキャラ男子達（多数）はみんな転生者。

- ・堂々とISに乗る野郎共。

- ・原作のイベントを大袈裟に描写。さらに一部を大幅に改竄。

- ・しかも最初の方IS関係無し。

・ラノベネタ、アニメネタ多数。

・真耶先生がMAYA先生。

・最近の作者は『機甲戦記ドラグナー』『ギルティクラウン』が好きで好きで夜も眠れない。

・原作開始時点でIS学園のパワーバランスが以下の通り。

千冬>>>>楯無>>>真耶>>ラウラ>セシリア〓鈴>シャル〓
簪 一夏（今作では微妙に強化されています） 篤>のほほんさん達
一般女子>オリキャラ男子達

・IS学園に足りなかったのは男子寮と体育祭（or球技大会）だよ！

・物語は基本的に一夏視点、オリキャラ視点、三人称視点で進み、各巻ごとに『今回の主人公は一夏と。』という風に展開。尚、原作以前のエピソードは殆どオリキャラ視点。

以上の注意書きに何かしら引つ掛かりを覚える方は、あまり真剣に読まないことをお勧めします。これまで小説らしい小説を書いた事の無かった学生が書くものですので。

開始してしばらくはオリ主『三上^{みかみ}孝明^{たかあき}』の紹介のような話になります。IS原作のキャラクターと出会うのは中学三年です。

では、大丈夫な方はGO！

プロローグ 誕生（前編）（前書き）

始まりました。プロローグ編は主人公の前世を少しばかり。それと、何故転生するに至ったのかを書きたいと思っています。

ブローグ 誕生（前編）

それなりに良い人生だったのかな、と。三上孝明^{みかみ たかあき}は自問し、自答した。

中学生までは苛められまくった。今考えると当時の自分勝手な性格が原因だった為、まあ自業自得だな、と諦めることができるが、それでも当時は辛かった。なにせ、この世の全てが自分に敵意を向けているようにすら感じられたのだ・・・碌に勉強もせず運動もせず、口先だけで世渡りしようと思っていた中学生に、一体誰が好意的な目を向けるというのか。当時に戻れるのなら思いつきり説教かましてやりたい。SEKKYOUでも可。もうあの駄目すぎる子どもを少しでも矯正できるならなんでも良い。

高校に進学して運動部の先輩達に扱かれ、まあまともな人格に近付いたかな、と思う。ついでに、少しだけだが体力も付いた・・・運動部では結局、三年間補欠のままだったが。面倒くさがりだったので、それも悪くないかな、と思う自分がいたのもまた、事実だ。・・・余談だが、学生寮でよくつるむメンバーの夜食は大体自分が用意していたので、いつの間にか「お母さん」などという渾名が付いていた時はすこし泣きたくなった。別段料理が得意なわけでもないのに。そもそもやる様になったのは毎度毎度じゃんけんで負けていたからだ。

大学は、国立に落ちて近くの私立に通っていた。この頃はいい加減に、自分の力を過信することも無くなっていたので、まあ俺の頭じゃ無理だったか、と諦めることができたが、国立に比べて異様に高い授業料だけが親に申し訳なかった。

大学で、一人の女性と出会い、意気投合した。話しているうちに、中学生の時に自分を苛めていたグループの女子だったと気付いた時は驚いたものだが。

「三上って聞いてピンと来たんだけどね、昔と比べてかつこよくな

つてたから、どんな風になったのかなーって思っ

などと笑いながら言うのだから、彼女も人が悪い。かつこよくなつたと言われて思わず浮かれたが、おそらく面構えから中二病が抜けて幾分かまともになったからだろうなと思う。

やがて、孝明は町の小さな工場に就職し、大学で出会った彼女と結婚した。中学の知り合い達からは、まさかお前達が結婚するとは思わなかったと一様に驚かれたが、それでも皆、自分と彼女の新たな門出を祝ってくれた・・・本当に、何故彼らと中学のときから仲良くすることが出来なかったのだろうか、改めて自分が恥ずかしくなった瞬間でもあったが。

二人の子どもに恵まれた。上は男の子で、下は女の子。子ども達が愛おしく、仕事も遣り甲斐があり、日々が楽しかった。

そして、今。二人の子どもと、その家族に囲まれて、三上孝明の・・・私の人生は、終わろうとしている。

一昨年、肺に癌が見つかったといわれた時は、ああ、こんなもんかと思つた。延命治療もしたが、もともと体力に恵まれなかった身体では、二年が限界だった。

医師に頼んで、呼吸器を外してもらつた。息子は自分同様に禿げ上がってしまった頭と肩を震わせているのだろう。娘も涙を堪えているのだろう。けれど、随分と前に糖尿の合併症で失明した自分にはそれらは見えず、声と感覚からそれらを推し量るしか出来ないのだから。なにも事態を把握していない曾孫だけが能天気になきゃあ

と声を上げて笑っていたが、不思議とその声につられて自分も笑っていた。

「ま、私の人生はこんなものだよ」

「父さん・・・！」

「お父さん・・・」

「爺さん・・・」

「おじいちゃん・・・」

「どれ。孝幸、こっちにおいで」

「あう、じーじ？」

悲鳴を上げる両腕の筋肉に鞭打って、まだ幼い曾孫を抱き上げる。

「覚えておくといい。人生とはやり直しがきかない。だからこそ、面白いのだ」

ろくに言葉もわからぬ子どもに、何を言っているのだろうかとなと私は自嘲する。それでも、それだけが。私がこの子に、この場にいる私の家族に伝えたいただ一つの言葉だった。

やがて、長らく黒い世界しか映し出すことの無かった視界が、ゆっくりと色を変える。それらが完全に切り替わり、意識がなくなる寸前。私はその色が、白と呼ばれる色だったことを思い出していた。

三上孝明 享年86歳。死因・肺癌。

「お待ちしておりました、三上孝明。新たな人生を歩む者よ」

「・・・なんじゃと？」

どうやら、私の人生が完全に終わるには、もう少しばかり時間が
必要らしかった。

ブローグ 誕生（前編）（後書き）

主人公：三上 孝明

見た目：黒髪黒目、中肉中背、身長は168センチくらい。

お茶の類が好き（紅茶、緑茶問わず）。

孝明の設定は意識的に、作者自身を投影しています。もしも自分がISの世界に行ったら何するかなあ、といった具合に。

・・・こーゆーの好きな人なら、一度はやったことあるよね？ね？
チラッチラッ

プロローグ 誕生（中編）（前書き）

前回の投稿時のミス。プロローグは三話です！

あ、ちょ、石投げないでー！？

プロローグ 誕生（中編）

そこは、何の変哲も無い空間。空を見上げれば星と月があり、足元に視線を落とせば土に根ざした草が見える。かすかに聞こえてくるのは潮騒の音か。

目の前に立つのは、ただの少年・・・だが、その髪は綺麗に白く染まっている。いや、“染まっている”という言い方は正しくないだろう。少年の髪は僅かな傷みも見受けられず、それが天然のものなのだとわかった。

その姿にはどこか、侵されざるべき荘厳な雰囲気があり、思わず私は生涯信じることの無かった神仏の類を連想したほどだった。

「お待ちしておりました、三上孝明。新たな人生を歩む者よ」

そんな威厳ある少年にいきなりそんな事を言われれば、間の抜けた返事しか思い浮かばないのは私だけでは無い筈だ。

「・・・なんじゃと？」

「その疑問詞には如何様な意味が込められているのか。推定できるのは三十五の疑問に対してのものですが、統計的に見て一番多いと言える疑問に対して答えましょう」

言うなり白髪の少年は私の手をとって歩き出す。杖も車椅子も無いのに自分が自然と歩けていることに気付いたのは、歩き始めて三分ほど経った頃だった。

「此処は夢と現の狭間の狭間。目に見えずして存在しない地。霊長類が“死後の世界”と呼ぶ場所です。加えて此処は始まりの地。魂の子宮。再び世に生まれる魂が、新たな生き様を夢見る場所です」

――再び世に生まれる？

真っ先に思い付いたのは、転生、という言葉だった。たしか、自分が若い頃に友人たちがそういつた話で盛り上がっていたのを覚えている。そういえば昔漫画で読んだことがあったな。結婚式直前に事故死した男が、恋人が飼っていたペンギンに乗り移って恋人を見守るという作品が・・・いや、あれの場合は憑依か？

・・・いや、ちょっと待て。言葉尻から事態を把握しようと思って考えてみたが、ここで小休止だ。

「まさかと思いますが、ここに居る者達がまた、転生すると言うのですか？」

「然り。霊長類の言葉で言えば『そのまさかです』」

・・・どうも死後の世界の番人たる少年は、なかなか茶目っ気のある人物のようだった。

「あなたの最期には、少なからず未練のようなものを感じた。それであなたは死を受け入れました。理由を聞いてもよろしいか？」

少年が、まっすぐに私を見据える。

けれど私の答えなど、最初から決まっていた。

「・・・老いて衰え、子と孫たちに囲まれて死んだのです。なんの未練がありませんか？」

そうだ。少なくとも、あの死に未練など無かったはずだ。

「否、死そのものではなく、あなたが感じた未練は死に至るまでの数年間のもの。『このままでは死ねない』、『こんな形での死は嫌

だ』という想いが、あなたをこの地へ引き寄せたのです」

「それは・・・」

そんなことを言われても、あの死に未練など無い。なにより私自身がそう思っている筈なのに。

答えることのできない私を置いて、少年は身を翻した。

「何故に自身がここへ招き寄せられたのか。思い出したのならばお声をかけてください。私はその願いを聞き届けて、あなたを再び送り出そう」

言いながら、しかしこちらを振り向くことなく、少年は歩いて行った。

「・・・ひとまず、ここはどこなのだ」

意識を切り替え、あたりを見回してみた。少年に連れられて歩いているうちに、いつの間にか私は砂浜を歩いていたようだ。砂浜には私以外にも数人の人影が見えた。服装はさほど珍しいものでもなく、ここがキャンプ場だと言われても私は信じるだろう。

ただし、なにかしら違和感があったが。

初めにそれに気づいたのは、目の前に立つ青年の腹部を見た瞬間だった。

「ひいつ!?!」

「わっ!?! な、なんスか!?!」

その姿を見て、私は年甲斐もなく息を吞んでしまった。青年が身に着けていたパーカーの腹部は、どす黒い染みが広がっていたのだ。

「き、君、それは!？」

「へ?・・・ああ、これ。生前のもですよ。俺の死因は刺殺だったんです」

なんでもなさそうに言う青年の言葉に、私はこの空間が死後の世界なのだということを思い出した。

「・・・あれ。おじーさん、もしかして来たばかりなのか」
「あ、ああ」

しどろもどろの私の答えに、青年はふーん、と頷いた。よくよく周りを見てみれば、右腕と左腕で肌の色が違う女性が歩いていたり、足を引きずる子供がいたり、皆表面上は無傷に見えて何かしらの傷の跡があった。

「うーん・・・おじーさん、死ぬ前に目に不自由とかあった？」

「む・・・ああ。何年か前に糖尿でな」

「なるほど。今おじーさんの目がどっちも真っ白になってたから、もしかして、と思ったんだけど」

なるほど、生前の傷跡が反映されるのは私も例に漏れなかったらしい。

「ところでおじーさんは何でここに？見た感じ、事故で死んだとかではないみたいだけど」

ふっと浮かんだ言葉は、青年の言葉によってかき消された。

「・・・正直言つてわからん。私は自分の人生に未練なんか無かった筈だが」

「ふうん、羨ましいな」

「羨ましい？・・・そういえば、君こそなぜこんなところに。まだ若いようだが・・・」

私の言葉に、青年は苦笑を浮かべる。

「言つたでしょ、刺し殺されたつて。それも結婚直前に恋人にね」
「・・・すまん、悪いことを聞いた」

気まずげにつぶやいた私に向かって、青年はさほど落ち込んでいないような声色で言つた。

「まあ、過ぎたことだしね。正直、もっかい人生やり直すのが怖かつたけど、いい加減覚悟決めたんだ。やってやろう、つてね」

「覚悟？」

「ああ。もう一回人生を楽しめるんなら、やらなきゃ損だ。だつたら、とことん楽しもうと思つて」

なるほど、そういう考え方もあるか。

「それに、新しい力を持つて生まれることが出来るんだ。今度はきつと、いい人生にしてみせる」

「新しい力？」

「あの子どもから聞いたでしょ。『願いを聞き届けて、再び世に送り出す』って。あれは、生前叶えることの出来なかった望みを一つ、叶えてくれるってことさ」

言つて、佑介は手をひらひらと振る。

「俺は生前、人から信用されることがなかったんだよ。たぶん、昔の恋人も何か俺を疑つてたんだと思う。だから、俺は今度は、人から信用される俺になりたい」

「そう、か・・・君にいい人生が訪れることを祈つておるよ」

青年はこれから、あの少年のところへ向かい、転生するのだと言う。短い会話を交わした私と青年は、そのまますれ違い・・・ふと私は氣になったことがあつて、青年を呼び止めた。

「のう、君の名を覚えてくれんか？ここで出来た初めての友人の名を覚えておきたいんじゃない」

私の言葉に、青年はきよんとすると、微笑んで言った。

「佑介。いいおかゆうすけ飯岡佑介だ」

「私は、三上孝明という。では、縁があつたらまた会おう、佑介」

手を振りながら、青年は・・・佑介は、去つて行つた。

この時出会った彼が、後に訪れる私の第二の人生においてまさか生涯の友人になるとは、この時の私は思ってもいなかった。

プロローグ 誕生（中編）（後書き）

早く本編が書きたい。けれど真面目に転生を扱うと決めたのでちゃんと理論じみた（厨二）理屈を用意しないと。
次回、ようやくと主人公が転生します。

プロローグ 誕生（後編）（前書き）

転生にかかわる云々は今回でラスト。次回から、ようやく主人公の第二の人生が始まります。

プロローグ 誕生（後編）

あれからどれくらいの時間が経ったのか。時間の概念すら危ういこの空間では、それを正確に推し量ることは出来ない。ただ海を眺め、新たな自分の身の振り方を熟考する。叶えられなかった願いとは何だったのか。身を助ける一芸を授かれるならば、何が欲しいのか。

「私の未練がなんだったのか、結局私はまだわかっていないんだな・
・・」

佑介を見送って、暫く経った。それから私は、この場にいた人々と話をした。彼ら彼女らはそれぞれが、自分がどういう死に方をしたかを語ってくれた。

それでも私は、未だに自分の願いが分からなかった。

「三上孝明。ここに居られましたか」

体言止めと敬語が混ざったちぐはぐな言葉遣いが聞こえてきて、ふと私は視線を上げる。やはり、そこには私をこの砂浜に連れてきた少年が立っていた。三角座りで海を眺めていた私の方に近づいてくると、少年は言った。

「この場にいた者たちは皆、己の願いを私に伝えて新たな人生へと進んだ。この場にいた死者はあなたで最後です」

そう。おおよそ数時間前だろうか。『今度は死ぬ前に大学へ進学したい』と言っていた女性が少年のもとへ向かったのを最後に、この砂浜から私以外の人影が消えた。

自分の未練が分からないのは、私だけになったのだ。

私は突然の彼の来訪に驚いたが、彼は私を見て淡々と語り始めた。

「これまで、あなたのように己の未練が分からぬ者がいなかった為に言う必要がありますでしたが、転生には刻限がある」

寝耳に水もいいところだった。

「で、ではその場合、私は」

「刻限を過ぎれば、あなたはただ彷徨う魂として、新たな生を歩むことも消えることすらもなくこの場に存在し続ける」

それは、私が完全に、ヒト以外のなにかになることを意味した。

「それが嫌ならば、早々に己の願いを見つけることです」

言いたいことを言い終えたのか、少年は砂浜から去って行った。

「・・・私の、願い」

消滅することもなく、ただ悠久の時をさまよい続ける迷い子。それは、どんな苦痛だろう。とうに人生を終えたからこそ、私はこの地に招かれたはずなのに。あるいはこれが、死の間際に見ている胡蝶の夢であって欲しいとすら思う。

「私は」

いつも見ていた海。覗き込めば、そこには勝手知ったる自分の顔。そして、白く濁り、光を映す事の無くなった両の瞳。

「そうか。私の願いはこれだったのか」

佑介との会話の中で胸に悶えた感覚は、これだったのだ。

「私の願いは――」

私は、少年の姿を探して、砂浜から離れた。森の中に入り、木の枝を掻き分け、時にその根に躓いた。

「はあっ、はあっ……」

息が上がる。老いたこの身に、森の中での散歩はちと厳しい。けれど、せつかく見つけた願い。見つけてしまえば、叶わぬままに諦めることは到底できなかった。

「今度こそ……今度こそ……!」

そうだ、“あの時”感じた悔しさを、何故忘れていたんだろう。確かに私は、自分の死に未練はなかった。

——けれど、私は。私が“彼女”の死を見送ることが出来なかったことを、悔やみ続けていた！

「決して損なわれない光が欲しい」

佑介も言っていたではないか。私の目は真っ白だ、と。

「この目で、世界を見続けていたい」

それが。それこそが、私の未練だった。

「私は！自分の目で自分の世界を見続けていたい！」

叫ぶように、言葉を発した時。

「合格です。おめでとう、三上孝明。あなたはここまでたどり着き、自分の願いを私に伝えた」

森の中の開けた場所で、私は少年と数分ぶりに会った。

「聞こえていたのなら話は早い。私は、死ぬまで失われぬ視力が欲しい」

少年がわざわざ警告に来たことからして、私に残された時間はさ

ほど多くはないだろう。転生の刻限があるのならば、私は急いでそれを成し遂げたかった。

「その言葉に二言はありませんね？今なら、願いなおせば来世での富や名声も約束されるのですよ？」

「いいえ、必要ありません。私の前世での未練はただ一つ、妻の死に顔を見ることが出来なかったことだ」

妻が逝ったのは、私よりも六年ばかり早かった。その時私は、既に失明していた。彼女が笑って逝ったのかさえも、見ることが出来なかった。

「私はもう、あんな思いをするのは御免です。私は視力が欲しい。それ以外のものは要りません」

私の言葉に、少年はしばし瞠目する。

「・・・解りました。それでは」

言って目を開き、私を見ると微笑んだ。

「具体的な数値の指定をお願いします」

思わず前のめりに転んだ私はきつと悪くない。

若干緩んだ空気に戸惑いながら、私は己の願いを急いで口にした。
時間がないのは変わらないのだから。

「え、えーそれではその・・・目は・・・視力は両目2.0でお願いします」

「色は？」

「はい？」

「灰色ですか」

「い、いえ黒で。生前と同じ色で」

私が言い切ると、少年の前に光の線が現れ・・・何事かと私が身構えるより早く、それは私を取り囲み、まばゆい光を発し始めた！

「な、これは!？」

「それが終われば、あなたは新しいあなたに生まれ変わります。あなたの新しい人生に幸あらんことを・・・」

少年はそこで、再び私に目を向けた。

「ただ、一つだけ言うことがあります。あなたが生まれ変わるのは、一つの物語の世界。あなたはその世界で、物語に巻き込まれ、苦しむでしょう。それでも忘れないでください。あなたはもう、以前のあなたではない」

なんだ、それは。どういう意味だ。

私が、その言葉の意味を問う暇もなく。

——私の意識は、一度途切れた。

プロローグ 誕生（後編）（後書き）

オリキャラ達に原作の知識はありません。こいつらは自分の考えやら前世のトラウマやらに従って原作の中で東奔西走します。

それによって原作が一部崩れたりしますが、はてさてどうなる事やら。主にプロットすら出来上がっていない夏休み以降のエピソードが（オイ）

わーいやっとシャルが書けるよう。

第一話：対策会議（しかし半分ぐらい徒労）（前書き）

こんばんは、よしおかです。書き溜めの内容を見返してみてもびっくり。驚くほどに内容が薄い！

・・・はやく・・・早く、原作が書きたいんです・・・

第一話：対策会議（しかし半分ぐらい徒労）

転生して数年が経った。

前世と同じく三上という家に生まれ、これまた前世と同じく孝明という名前を与えられた私は、今のところ大した怪我や病気をすることも無く、至って健康にすくすくと育っている。

前世との大きな違いと言えば、この年でここまで思考ができることか・・・とはいっても、初めからこんなことが出来たわけではないが。

初めにあったのは、何か、違和感のようなもの。言葉に出して会話をしたい、しかし言葉が出ない。何かを考えようとすれば、必ずどこかで思考に靄がかかる。そんなもどかしさが、常に頭の中にあった。

その理由を思いついた時、私は愕然とした。

話は簡単。私の『意思』がしゃべろうとしている言葉が、私の脳に、『肉体』に蓄積されていないのである。

この理由に思い当たった後、私は必死に父の書斎にあった本を読み、それを音読することで意識と肉体との差を埋めようとした。成果は上々、私は思考と言語との差を、段々と感じなくなってきた。子どもの脳が恐ろしい勢いで身の回りの言葉を学習することが出来るというのは本当だったらしい。

もちろん、身の回りの大人や同年代の子ども達と会話する時は、必死に見た目にそぐわない話し方をしないよう意識して喋っているのだが・・・はつきり言って、我が事ながら気持ち悪いのだ。「あのね、きょうね。。。ちゃんとおままごとしたんだよ！」と母に向かって喋る自分が。その母親すらも、前世の自分よりかなり若い。ちょうど一度死ぬ直前の孫たちがあの年頃だっただろうか。

まあ、要はあまり喋りたくない。

もう一つ、転生して驚いたことがある。それは・・・

「孝ちゃん、佑ちゃんが遊びに来たわよー」

「こんにちはー！」

若干舌つ足らずな声と共に、母親に連れられて我が家にやってきた少年。飯岡佑介が、私の隣の家に住んでいたことだった。

私が生まれた時、私自身の意識はあまり明確になっではいなかったものの、周囲の大人が何をしゃべっているのか、聞き取ることは出来た。

その中に、「あらあら、うちの佑介とお友達になるかしらねえ」という声が混じっていたのだ。

それから何ヶ月か経って、私の母は私を抱いて、お隣の家を訪ねた。そこに居たのが、私より二ヶ月ほど早く生まれた——私より二ヶ月早く生まれ変わった——飯岡家の長男、佑介だった。

・・・ついでに言ってしまうと、母親とはいえ二十代の女性と共にいるのが辛い佑介は、何故か母親よりも父親に抱かれていた方が泣かない赤ん坊として町内では有名になっていた。その度に彼の母が悔しそうな目で夫を睨み、睨まれた佑介の父は苦笑するという事態が度々起こっていた。

何故かと言えば、彼の前世での死因、恋人に刺されて死亡。が原因である。端的に言ってしまうえば、^{よわい}年齢数か月にして、佑介は女性恐

怖症を抱えていた。

閑話休題。

以来、私と佑介は出来る限り行動を共にし、二人で本を読み、知識の共有を図った。私の母も佑介の母も私達が仲良くなることが嬉しかったらしく、私達はよほど危ないことがない限り、二人で一緒にいるのならば親の目の無いところで遊んでいた。

その『遊び』の内容も、どちらかと言えば私たちの話し合いだったのだが。

今日も今日とて、三上家の客間で私と佑介は話し合っていた。この時間帯は父は書斎で仕事をしているし、私と佑介の母は趣味の料理のために台所に籠っていて、私たちが客間でこそそと話をしていたとしても聞き耳を立てる人間はいない。

「はああ、ようやく普通に喋れる・・・あー、共通語万歳。いろはにほへとちりぬるをー」

「まあお互い、あの喋り方は疲れる物があるからな」

ため息を一つ吐いて、私達はソファに腰かけた。私達の前には、母からもらってきたジュースの入ったコップと、幾らかのスナック菓子・・・そして、普段私がソファのクッションの中に嚴重に隠している、一冊の自由帳だった。

この自由帳は、何かの連絡の際に私と佑介が使っていたノートである。たとえば、今日のように私たちが会って話をするとき、話の内容を書き留めておくような使い方である。

「・・・で、じーさん。どうするんだよ」

「・・・どうって、何が」

ノートを広げてテーブルに頬杖をついた佑介は、私に切り出した。

「生まれ変わるときに言われただろ。今俺達が居るのは、何かしらの物語をモチーフとした世界・・・つまりは、何かの事件が起こる世界だ」

「・・・私もお前も、その“物語”に巻き込まれる、というあれか」

私達が今日、話し合おうと決めた内容がそれだった。

私と同じように、佑介もまた生まれ変わる際にあの白い少年に言われたのだ。今私たちが生きているこの世界が、物語の世界で、私たちはその物語の当事者の一人となる、と。

意識が明瞭になるに連れてその言葉の危険さを思い出した私達は、何とか最悪の事態を回避するべく、その物語の輪郭だけでも把握できないかと頭を捻り始めた。生まれ変わってそうそうにトラブルか何かでまた死亡など、冗談ではない。私達は今度こそ、納得のいく人生を歩みたいのだから。

自由帳の真っ白いページに、佑介はこれまでの話の内容をまとめていく。

「・・・にしてもお前さん、相変わらず汚い文字だな」

「ほつとけよ！？子供の握力じゃこれが精一杯なんだって！？」

がーっと吠える佑介。彼が生前とある工業大学で習った知識によると、人間の関節というのは成長に合わせて可動範囲が広がるもので、三歳から五歳の間にかけて手首の周りが大人と同じように動き始めるらしい。そういえば私もつい最近になって、利き手である右手の中指と薬指を別々に動かすことがようやく出来るようになって

きた。

「まったく・・・ま、ともかく。一体その“物語”が何なのかはまだ皆目見当が付かないけど、それでも何か対策を練ることが出来るはずだ。わざわざ巻き込まれるまで、手をこまねいて待ってるのは面白くないしな」

「ただ、問題はそこだろう。今から対策を練るとして、一体どういう方向性に？何をすれば、これから起こる“事件”に対応できるというんだ？」

「それは、ええつと・・・ほら、身体を鍛えたりとか」

出端から私の指摘で話の腰を折られた佑介は、しどろもどろに言葉を紡ぐ。

「・・・あのなあ、ここは日本だぞ？世界一安全な国なんて言われている。加えて私たちが今居るのは東北だ。関東の方ならともかく、こんなところに居れば事件に巻き込まれることなんて——」

この時、私の頭の中に思い浮かんだ事件とは、マフィアの抗争だとかそういった事だった。しかし、それが佑介には甘いと思えたらしい。

「ジーさん、見通しが幾らか甘いよ」

人差し指を立てて、佑介はそう言った。

「物語っていうのは、それこそ御伽噺だ。何が起きたって不思議じゃないさ。そもそも俺たちのこの『能力』^{ちから}だって、十分にありえないものでしょ」

そうだ。私と佑介が手にした力は、本来普通にもっているようなものではない。

生まれ変わるとき。私は視力を。佑介は人からの信頼を望んだ。結果、私は体が発達しきつていないにも関わらずに、一キロ先の信号の色を見分けられる目を。佑介は初対面の人物からも信用される、独特の雰囲気を身に着けていた。

なるほど、佑介の言いたいことは分かった。私は、おとなしく彼の話を聞くことにした。

「じーさん、アニメとかは解る？」

「アニメ？・・・ああ、若い頃はよく見ていたが・・・」

アニメと言われて私が思い浮かべたのは古き良き宇宙戦艦の物語だった。三十年近く経ってから実写版が作られたらしいが、ちょうどその頃私は既に劇場に足を運ぶのも億劫な年齢になっており、残念ながら結局見ていない。

「ああいうアニメ作品に出てくるトラブルっていうのは、大抵が一般人には極力隠されるものなんだ」

「むう、そ、そうなのか」

「そうそう。余程の事が無い限りは悪人だって一般人に危害を加えたりなんかしない、とか」

「・・・一般人に危害を加えるから悪人って言うんじゃないのか？」

いやそれはそうなんだけどさあ、ああその辺りの矛盾が結構あるからあの作品二次創作盛んなのかなあ、となにやらぶつぶつ言いはじめた佑介だが、やがてその話題の事は脇に置いておくことにしたのか、頭をガシガシと掻きながら話を再開した。

「あー、たとえばだ。俺が前に好きだった“作品”の話で、魔法使い同士の戦いだとかそういう話があったんだけど。あれも舞台は日本の地方都市だった。しかも主要人物の年齢が軒並み一桁から十代前半。これだった場合は、マジで今のうちから対策練っておかないと冗談抜きで命に関わる。他にも、俺がよく遊んだロボットゲームの三作目は日本が舞台だったな。そっちの方はほとんどストーリー覚えてないけど」

駄目だ。魔法だのロボットだのと、佑介が言っている事の内容がさっぱり理解できない。大体にして、十代に行くか行かないかの年齢の子供たちが命がけで争うような物語だと？その世界の倫理はどうなっている。佑介の手元の文字を読む限りでは、り・・・りりなの？とか言うタイトルらしいが。

「色々と設定があつて、徹底した実力主義のせいで平均的な就業年齢が大幅に下がつてるとかそんな感じだったと思う。それに、映画にもなった人気の作品だったんだよ」

「・・・お前には悪いが、なんでそんな血生臭そうな作品が人気なのかさっぱりわからんよ。これが世代の差か」

「その言い方ですら俺の時には古かったよ。ジェネレーションギャップって言ってたから」

・・・むう。

「まあ、それはさておき。そういう作品に詳しいと対策も練りやすいんだけど・・・じーさん、そういうの全く詳しくないでしょ」
「ぬ・・・わ、私だってそういった知識の一つや二つ・・・!」

どこか諦めたような佑介の視線が癪に障り、私は前世の知識から必死に、物語のストーリーを手繰り寄せる。本も読まないボケ老人だと思ふなよ。（佑介はそこまで思っていない）

「ああ、そうだ！水滸伝は原作も北方謙三版も読んだぞ！」

「ここ日本なんだけど」

「け、剣客商売！藤田さんが舞台に立ったアレ！」

「開国から百年経ってるんだけど」

「そ、そうだ！息子に薦められて『・NE PIECE』は読んだぞ！」

「・・・いや、たしかにアレ面白いけどさ。現代日本であの海賊漫画の知識？」

「・・・すまん、ワシ戦力外」

素直に負けを認める事にした。

ソファの上で佑介に背を向けて三角座りになった私を見かねて、佑介がフォローの言葉を紡いだ。

「ああでも、別の世界に引つ張られるっていう展開も可能性としてはありだな。充分検討しておいた方が良いか」

とりあえずここまでのおさらいーっと、と言いながら、佑介ががりがり自由帳に文字を書いていく。いつまでもいじけている訳にもいかなないので、私ものそのそとそちらに体を向けた。

「いずれにせよ初めに俺が言った通り、まず第一に身体を鍛えてお

く事かな」

言って、佑介が指差した自由帳には、一、二、と番号が振られた文字の並び。

「『魔法』や『ロボット』だったら少なくとも体力が必要になる。じーさんは目も良いし、弓矢だったり銃だったちの扱いにも慣れると良いかもしれない」

そこで、佑介の指が下に動く。二段目の文字はミミズののたくつたような文字で『異世界』と書いていた。

「次、『異世界』だった場合。この場合は、体力に加えて、酷い環境の中でも生き残れるサバイバル技術、あとは現地で味方を増やす為の社交性が必要。サバイバルはキャンプとか行けば自然と身に付くだろうし、社交性は俺の担当になるだろうな。一応“魅了”の力がある筈だから」

そして三段目。

「最後、『推理』だった場合。これが一番難しい。推理小説や推理漫画ってのは、清々しいほどに人が死ぬ。人が死ぬから事件になって、それを謎解くために名探偵が活躍するんだからな」

推理というと、娘が小学生のころに好きだった小さな名探偵の物語が私の中では一番イメージが強い。なるほど、あれは『もはや呪いのレベル』と言われるほどに死人が出ていた。

「……つまり、私達も誰かに殺される可能性があるという事か？」
「……まあ、その可能性も小さくは無いんだよね」

あまり知りたくなかったことを知った気がする。

「これの対策としては、普段から人の恨みを買わないように生活する事の一点しか無いね」

「・・・佑介、大丈夫か？確か前世のお前さんって・・・」

「あー！ー！ー！！聞こえない聞こえない俺は何も聞ーこーえーないー！！！！」

結婚式寸前に恋人に殺された過去を持つ男は、耳を両手で塞いで叫んだ。どうやら生まれ変わって五年経ってもトラウマは消えないらしい。

三上孝明、飯岡佑介、共に五歳の春。

この半年後。『インフィニット・ストラトス』と呼ばれるパウードスーツの登場に、私たちは揃って頭を抱える事になる。

「「見通しがとことん甘かった・・・！」」

第一話：対策会議（しかし半分ぐらい徒労）（後書き）

対策会議、徒労に終わるの巻。五歳児がこんなところそこそやってたら微笑ましい通り越して気色悪いですが、原作の十年前にISが登場したという設定上、この無駄話ができるのは五歳から六歳の一年間だけでした・・・

佑介の設定はそのうちにまとめたいと思います。

12 / 5 文章を一部修正しました。

第二話：時の流れ（前書き）

こんばんは、よしおかです。前回からいきなりキングダムゾン
して中学生。今回はあの人がちよっとだけ登場！はやく本編で活躍
させたいです。

第二話：時の流れ

（世界も、とことん変わったな）

十月某日、全国中学校総合体育大会、いわゆる中総体の剣道競技会場にて。壇上で選手宣誓の言葉を述べる他校の女子生徒の姿を眺めながら、私は心中で呟いた。

「宣誓！我々、選手一同は日頃の練習の成果を充分に発揮し・・・」

数年前まで、あの場に立つのは昨年の優勝校を率いる『男子の主将』が当たり前だった。それが今では、当たり前のように女子生徒の中から部長が選別されて、当たり前のようにその女生徒が宣誓の言葉を読み上げる。まして、『前回』の私が生まれ育った時代なら、男子は剣道・女子は薙刀という線引き・・・というか、暗黙の了解があった。

それが、今では男にできることが女にできない筈がない、と叫ぶ者が居るのが当たり前になった。

世界はゆつくりと、しかし着実に、女性が牽引する社会を作り始めていた。

七年前。インフィニット・ストラトスが発明された時、世間の反応はどこまでも冷ややかなものだった。けれどこの世界が明確なストーリーに沿って進むと知っていたからか、私と佑介には真っ先に、それがこれからの世界を大きく変える物だと分かったのだ。

結果、後に『白騎士事件』と呼ばれる、下手を打てば私も佑介も

死んでいたかもしれない大事件が起こった。世界中の弾道ミサイルが日本目掛けてすっ飛んできたのである。

日本政府が事態の把握に追われ、米国をはじめとする弾道ミサイル所有国はなぜ自国の兵器が使われたのかで大混乱。太平洋、日本海など海に面した土地に住んでいた人々は大パニックを起こし、死に物狂いで逃げ出した。事実、私の家でも父と母が私を連れて取る物も取り敢えず、近所の山の中に逃げ込んだぐらいなのだ。

そんな時に、『それ』は現れた。

突如、海上に出現した超小型の——当時、対空防衛の要であった戦闘機に比べれば、平均的なヒトのサイズなどそんなものである——“ナニカ”が、手にした剣で次々とミサイルを切り裂き、拳銃に光の粒子をまき散らしたかと思うとその中から荷電粒子砲なる出鱈目な武器を取り出し、迫りくるミサイルの群れを一掃。慌ててスクランブル発進した戦闘機パイロット達の見撃証言によると、それはどう見ても人の形をしていた、というのだ。

『・・・圧倒的過ぎるだろ、インフィニットなんたら。アメコミのヒーローじゃあるまいし』

とは、事件が収まってからワイドショー番組でその一部始終（ネットに流出した動画だかを、報道特集で取り上げていた）を見た佑介の言である。

これを契機に、世界中の軍隊から既存の機動戦力が姿を消し、代わりにISと呼ばれる、『女性にしか扱うことの出来ない兵器』が第一線で活躍するようになった・・・まさか、女尊男卑などというふざけた風潮が出来上るとは露ほども思っていなかったが。

それにしても、これですますわからなくなった。一体、あの欠陥兵器が繰り広げる物語に、男の身である私や佑介がどうやって関わるというのだろうか。

佑介はまだわかる。彼は『前回』、工業大学に籍を置く学生で、殺害されなければそのまま大手自動車メーカーに技術者として就職していたはずだった。機械いじりが大の得意で趣味が高じて進路を決めたようなものだったらしいのだ。

どんなに出鱈目な兵器であろうと、人の手で金属から作られた代物ならば修理や整備に関わる人員は必要だ。そして、操縦するならともかく、整備するだけなら男にだって出来る。

実際、佑介は中学一年生にして、ISの技術者を目指して勉強していた。今ではすっかり同級生たちの中ではIS博士扱いである。

「たっかーあきー。お疲れっ」

噂をすれば何とやら。開会式を終えて、一度控えの席へ戻った私を出迎えたのは、文字通り生まれた時から友人。剣道部に所属していない佑介がここに居る理由としては、順調に市の大会を勝ち進んで県大会に出場した私達を、全校の生徒が応援に来たからである。佑介は、小学校に上がったあたりから私を“じーさん”とは呼ばなくなった。私もまた、言葉に出して自身を呼ぶ一人称を『俺』と変えた。なにやら、体だけでなく気分まで若返ったような感じがしたが。

（いや、実際若返ったんだっとな）

「どした？孝明」

「なんでもない。ちよっと小学校の時のことを思い出した」

「ふーん・・・」

しみじみと私が回想していると、佑介が声をかけてきた。

「なあなあ、開会式終わったら、暫くは自由時間だろ？客席から見ただけど、お前めちゃくちや暇そうだったぞ」

「・・・まあ、一年生の補欠メンバーである私はこの後おそらく一日暇なのだろうが。」

「喉乾いたし、水飲みがてらちょっと外行ってこようぜ」

言って、佑介は私の肩に手を置き、多少強引に私を会場から連れ出した。

「・・・背後から私に向けられる“女子達の”視線から引き離すように。」

「すまん、助かった」

「あー、構わないって。ああいうのは俺も気分悪いし」

廊下から会場の外に出て、人通りの少ない通路の自販機でジュー

スを買った後、私は真つ先に佑介に感謝した。

別に今の世界が気に入らないなどとストレートに言うつもりは無い。けれど、男だらけの町工場で汗水垂らして働いて一家の大黒柱と讃えられた経験——たとえ違う世界のこと、私とは異なる“私”の経験だったとしても——を持つ身としては、女性に引つ張られる今の世界にはどうにも違和感を覚えてしまうのだ。

だからだろうか。私は通っている中学校で、好意的な視線を向けられる事が少ない。

態度に出さないように気を遣ってはいたのだが、やはりどこかで素の私が出てしまったのだろう。周囲に比べて“女子に親切じゃない男子”である私は、少々孤立している。

「やつぱ、慣れない？」

「こればかりはな。如何せん、この時ばかりは『前』の記憶が邪魔だよ」

今の時代に適応しようとするなら、私の考え方は持ち続けられ続けられるほど、自分の首を絞めるようなものだ。けれど、こちらはその考え方を八十六まで抱えて生きていたのである。今から変えようとしても、意識し続けるのはどうにも上手くいかなかった。

現状、人付き合いの上手い佑介が私の味方でいてくれていることで大事には至っていないが、私としても少々居心地が悪い。高校に進学する際には是非とも男子校に進学したい。

十月になって肌寒くはなってきたが、晴れた空から差し込む日の光は眩しく、空気は暖かった。

それでも、さらに気分が寒々しくなることに事欠かないのが、今の時世で。

『——然るに、これまでの旧態依然とした政治を一新しなければならぬのです！衆議院では未だに男性議員ばかりが大きな顔をし、彼らは二言目には「女は家庭を守れ」「女は子育てに専念しろ」とばかり！このような時代錯誤も甚だしい——』

この市立武道館の近くで行われているらしい選挙演説。おそらく集まっているのは、女性の権利を向上させることを目的とした公約を掲げた候補者と、それに同調した女性たちなのだろう。

「言ってることは間違っちゃいないんだが、いちいち大げさなんだよなあ。あんな風に、男のすべてが無能みたいに言われたら、言われた方だって黙ってないだろうにさ」

「話で飯を食う人間なんぞそんなものだろう。『前』から俺は、政治家と宗教家は信用しないことにしとるよ」

私とて、『前回』の人生で自分より有能な女性などそれこそいくらでも見てきた。そして私は、能力や人格に男女の差など関係ないと思っていたのだ。どちらがより強いのか、どちらがより優秀かなど下らない。問題なのは、“誰が”優れているかだ。

それにしても、ISを作り出した天才科学者は一体何を考えて自らの発明品を世に出したのだろう。

女性の地位を向上させたかった？いや、だったらこんな“劇薬”を使うような真似はするまい。相対的に男性の地位は段々と下がりつつある。いくらなんでもやりすぎだろう。

自分の名を世に知らしめたかった？それもおかしい。確かにISの生みの親、篠ノ之束博士の名を知らない者は居ないと言って良いだろう。だがそれは、自らの発明品を活躍するだけ活躍させたら姿を消した、国際指名手配のマッドサイエンティストとしての悪名だ。名声を犠牲にしても、やりたいことがあった？それは、いったい何だ？平穏な生活を切り捨てても求める物だったのか？

（・・・やめよう。おそらく私には理解できん）

考えれば考えるほどに底なしの沼に嵌まる思考を切り捨てて、私は武道館の外壁に取り付けられた時計に目を向ける。時刻は九時の五分前を指していた。

「いかん。おい佑介、そろそろ一回戦が始まるぞ」

「あ、やべっ。戻らねえと先輩にどやされる」

運動部の基本は五分行動。佑介の焦った声と共に、私達は急いで武道館の中に戻った。

この後、なんとか団体戦の一回戦が始まる前に会場に戻った私は、補欠のメンバーが座る畳の上に正座しながら、先輩たちの試合を見学していた。私達の学校の男子チームは二回戦で敗れ、午前中には自由の身になってしまった。ただ女子チームが順当に勝ち上がり三回戦まで進んだので、私達は部員全員でそれを応援することになった。

そして、私は目撃することになる。後に友人となる一人の剣道少女の、姉への怨嗟が込められたそれはもう恐ろしい剣閃を。

とある都市のはずれに位置する、市立武道館。その一角で、その試合は行われていた。

相對しているのは、それぞれが違ふ中学校に通う剣道部所属の二人の少女。そのうち片方は、腰まで届く長い髪が、防具の後ろから一つにまとめて後ろに流されていた。

腰に巻く垂たれに刺繍された少女の姓は、篠ノ之。彼女の名は篠ノ之しん。数十分前に、同じ武道館にいるある少年が思いを馳せていた狂気の科学者の、血を分けた妹であった。

箒と対面に立つ少女は、先ほどから氣勢の声を張り上げる事の無い箒を訝しみ、攻めあぐねていた。

氣即刃。古来、剣道において剣は氣より出いでるものという教えがある。自らの心が向かい合う相手に勝とうと思つた瞬間に、竹刀が相手を打っている、というのだ。自然、一度試合場に立てば、竹刀を握る者は声を張り上げ、相手を倒そうと意思を空気に滲み出させる。

ところが、審判が開始を宣言してからの数十秒、箒は無言のまま、竹刀の剣先をゆらゆらと揺らすだけで、一向に少女に向かって打ち掛かって来ようとはしないのだ。

その上、隙もない。

少女は、所属する剣道部の中でも後輩を引つ張る二年生で、剣道の経験も多く積んできた。それ故に、一見やる気を感じられない筈の構えに一部の隙もない——少なくとも、自分の技量で“こじ開けられる”ほどの大きな隙は無い————ことを見て取っていた。

（・・・ああもうっ！）

年下の筈相手に時間ばかりが過ぎていく試合に焦り、少女は手元に力を籠め、俗に、『小さい面打ち』とも呼ばれる動作で以て、足を一步、前へ踏み出す！

「えやああああああっ！！」

この期に及んで、筈は避けることもなく少女をじつと見据えている。

（とった！）

少女が確信し、あとは竹刀の手応えと審判の判定を待つばかり、と思った瞬間。

ぱしっ、と軽い音と共に、少女が持っていた竹刀は、腕ごと大きく弾かれた。

「あ———？」

あれ、と思わず漏れた言葉が、完全に音を伴う前に。

「———ああああああああっっ！！！！」

少女の歩みは、鋭い気迫を伴った筈の体当たりによって大きく逸

らされ、がら空きになった胴に片手で構えた竹刀が打ち込まれた。

「胴あり！」

審判の告げた結果が、全てを物語っていた。

「・・・なに、いまの」

呆然と呟いたのは、観客席で私の隣に座っていた佑介だった。

「単純に自分の竹刀で相手の竹刀を弾いて、体当たりで姿勢を崩して、隙の出来た胴を打っただけ、だが・・・」

「いや、早過ぎだろ。なにあの子、さっきまで全然攻撃する素振見せなかったのに、反撃するとき竹刀が見えなかったんだけど」

そう、あの髪の長い女子が繰り出したカウンターは、少なくとも佑介の目には見えていなかったらしい。私は視力のおかげで、そして何より前世と合わせて十数年以上になった剣道経験のおかげで何とか目で追うことが出来た。おそらく、あの場で審判を務めていた剣道家の方々も似たようなものだろう。

それ以外の者に見えたのは精々が、うちの先輩が前に踏み込んだ直後、いきなり歩く方向を変えたところまでだろう。見るのもやる

のも、中学生にできる範囲の事ではない。

「それと佑介。あの女子の名前をってみろ」

「あ？・・・篠ノ之・・・しのののっ！？」

どうやらあの少女は、“あの”篠ノ之博士の家族が親戚らしい。

「おそらく『物語』の関係者だよ。もしかしたら、後々顔を合わせることになるかもしれないぞ」

「うっわー・・・勘弁してほしいな」

佑介がげんなりと言うが、私も似たような心境だった。もしも彼女と対峙して勝てるかと問われたら、答えは間違いなくNOだ。

結局、焦りがピークに達した先輩が再び竹刀を打ち込まれ、我が校の女子チームが三回戦敗退という結果が出るまでは、さほど長い時間はかからなかった。

私達は果たして、第二の人生を謳歌することが出来るのか。その悩みに、不安要素が一つ追加された、中学一年の秋だった。

第二話：時の流れ（後書き）

相も変わらず文字量が少ないうえに話が薄い。作者は剣道の経験はゼロではありませんが、辞めてからもう五年経ってます。なのでこんなに胡散臭い描写に。

・・・素振りだけでももっかい始めようかなあ・・・

12 / 10 誤字を修正し、文章を追加しました。

第三話：これより、物語は動き出す（前書き）

今回のセカンド・ライフは

- ・ 初っ端から佑介がヒヤッハーしています。ご注意ください。
- ・ 途中で原作設定の改竄や本作品オリジナルの捏造設定が出てきます。ご注意ください。
- ・ 後半から超展開入ります。ご注意ください。

の三本立てでお送りします・・・あれ？

第三話：これより、物語は動き出す

中学校生活三年間のイベントの中で何が最も楽しみかと言われるば、もちろん俺は修学旅行と答える。小学校の時も五年生で林間学校、六年生では隣の県への小旅行と遠出する機会があったが、東京まで足を伸ばすのは『今回の』人生でこれが初めてだった。

五月下旬。三年生になり、人生の岐路の一つ、高校受験まであと一年を切った俺達は、修学旅行で東京に来ていた。修学という単語がついている以上、東京で色んな企業や店舗を巡り、そこで見学した内容について後日学級でプレゼンをやらなきゃならないのだが、どういつもこいつも遊ぶ気まんまんである。

かくいう俺もその一人、旅行二日目の自主研修でとあるイベント会場を訪れた俺はノートと筆記用具片手に会場をあっちこっち見て回っていた。

「おおっ！？あつちで量子変換の仕組みの説明とかやってる！？やべえ絶対見ないと！」

「おい佑介ー！っ！待て、待ってくれ頼むからああああっ！！」

「待ちなさい佑介えっ！迷子になったらどうすんのよー！っ！っ！？」

。後ろから聞こえてくる同じ班のメンバーの悲鳴も何のその（待て俺は半年前から楽しみにしていた『IS技術博覧会』の会場で、歓喜の雄叫びを上げ――

「待・ち・な・さ・い・っ！って言ってんでしょーがこのスカタンがああっ！！」

「ぎゃああああああああっ！？」

追いついて来た女子の一人が背後から俺の首をがっちりホールド！歓喜の雄叫びは悲痛な叫びに変更された！どうしよう！？女子に密着されてるのに全然嬉しくねえ！！

俺の弱点、“女性恐怖症”を知らない奴はうちのクラスにはいない。それというのも、クラス替え早々、初めて会った同じ班のメンバーを相手に俺が悲鳴を上げたからである。それからはあれよあれよという間に情報がクラス内に知れ渡り、『佑介が何かしたら女子をけしかけるべし』という泣きたくなるような不文律が出来上がっていた。

「っはあ、はー、やっと捕まえた・・・みんなー、馬鹿確保したわよー」

「わ、悪かった！俺が悪かったからやめてよしてお願い離してええええええっ！？」

結局、うちの班長であるその女子は、他のみんなが追い付くまで俺をホールドし続けた。

「はー、ひでえ目にあった」

「こっちのセリフだ、馬鹿」

「いきなり会場で迷子とか勘弁してくれよ・・・」

まだ震えの納まらない体を両腕で抱いて顔を青ざめさせる俺に、同じ班の男子二人がやれやれ、といった具合に話しかけてくる。

「ここに来たいって言ったのは佑介なんだろ。ちったあ俺たちの事

リードしてくれよ」

全く以てその通りだった。

半年前、学校に掲示されていたポスターでこのイベント、『IS 技術博覧会』の情報を得た俺は、家に帰ってからすぐさま開催日程を調べ、連れて行ってくれと家族に頭を下げて頼み込んだ。技術者の道に進みたいと思っていた俺にとって、この博覧会は何に換えても体験したいイベントだったのだ。

ところがどっこい、それから数か月経ってもう一度調べなおしてみたら、なんとその開催期日のだ真ん中に、我が校の修学旅行の日があるではないか。学校の金で行けるのならばそれに越したことはないと思つた俺は担任に直談判し、この自主研修の選択ルートにIS 博覧会に行く班を作ってもらった。

それからさらに数か月。JRとゆりかもめを乗り継いで、やつて来ました東京ビッグサイト。各国のIS 開発企業のブースが軒を連ね、自社の製品のアピールやら何やらを展示しているのを見て、少しばかり俺の理性が吹っ飛んだ。

「・・・よつて、この様に機動性と防御の堅牢さを両立させた日本製の量産型IS『打鉄^{うちがね}』は各国でも高い評価を得ており、レスポンスよりもトルクを優先した設計の腕部は特に災害救助などで効果を発揮しています。実際の現場でも・・・」

今俺の目の前では、日本の最大手ISメーカー『^{サキモリ}防人重工組合』のプレゼンが行われていた。サキモリは自衛隊の要請を受けた日本の重工業企業や生物研究所の幾つかが、研究者や資金を出し合つて作られた会社で、事実上自衛隊専門のISメーカーである。

二年前にサキモリによって開発された第2世代型IS『打鉄』は、現在自衛隊が正式に採用しているタイプで、予備機も含めて五十機が全国に配備されているそう。

ふむふむ、と頷きながらプレゼンの内容をメモする俺。中学卒業後の進路をもう見定めている身としては、それに活かせそうな知識は出来るだけ持っていたかった。

ここで、少しばかり説明しておこう。現在日本には、ISに携わる者達にとって聖地メッカとも呼ばれる『IS学園』がある。ISの登場によって結ばれた『アラスカ条約』に則った経営のもと国連が資金を提供し、東京の海に浮かぶ孤島を開発して作られた学校で、ISの操縦や整備・開発の技術を教える専門学校。

日本にあると言ったが、学園は永世中立機関を謳っており、学園の敷地は日本でありながら日本ではない土地と言われている。どの企業、どの国家にも所属しない、既存のルールから外れた、独自の規則がある学園なのだ。

・・・というのが、一般的なIS学園のイメージ。

実はIS学園には、二つの学科がある。一つは、ISの搭乗者を育成する『操縦技能学科』。通う生徒たちは100パーセント女子だけで、東京湾に浮かぶ島の校舎に各国のIS搭乗者を目指す女子が集う学校。おおよそ上記の内容で間違っていない筈。これが世

間一般の人たちが見ているIS学園の生徒たちと言って良いだろう。もう一つは、関東内陸に校舎が位置する『整備技術学科』。主にISの操縦でなく修理や開発を教える工業系のコースで、こちらは別に完全な女子校という訳ではない。ISに“乗る”のは女にしか出来ないが、ISを“作る”、“直す”のに性別は関係ない。実際、去年もIS学園の整備技術学科を受験して、見事合格した男子学生は50人近い。

俺は『前回』の人生で、自分の手で新しい機械を生み出すという夢を叶えることが出来なかった。だから今回の人生では技術に触りたい。それも、最新鋭の、最先端の技術に。

そう思った俺の志望校が、IS学園整備技術学科になるのは、とても自然な流れだった。

サキモリのブースを見終わった俺達は次なる目的地、本日のメイイベント『自衛隊によるIS航空ショー』の会場へ向かった。

俺が買ったチケットは最前列で、なんとまあ無駄な幸運だ、と我ながら思ったものだが。と言っても、IS競技用の遮断シールドを張った施設が無い為、観客席とショーが行われる敷地は最低でも十メートル近く離れているのだが。

最前列の席で親父から借りてきたハンディカムを構えること数分。

『会場へお越しの皆さん、大変長らくお待たせしました！只今より、自衛隊神奈川基地所属・第三航空機甲小隊によるデモンストレーションを開始します！！』

軽快なアナウンスと共に、青く塗装された五機の『打鉄』が、会場の中央から空へ向かって飛び出した！

わあっ、と会場が歓声に包まれる。間近で見るISの生映像にか、それともそれを纏う女性自衛官たちの姿にか、観客たちは大興奮だ・
・言っておくが、俺は前者である。萌えゝとかぶひひとか言わない。決して。同じ班の男子二人がレオタード同然のISスーツを身に着けた女性自衛官を見て顔を赤くしているけど気にしない方向で、あいどんとけあ。

とかなんとか言っているうちに、五機のISはそれぞれ上空でばらけたかと思うと、円を描くようにぐるぐると旋回し始める。五人の中ではリーダーなのだろうか、他の四機に遅れて旋回を開始した一機が、客席に向かって飛んできたかと思うとぐるぐると高速でターン。五回連続のスピンを決めて、空へと戻って行った。

拍手喝采の中、五機は地上すれすれを飛びつつ、観客席に手を振りながら会場の脇へと飛んでいった。

『第三小隊の皆さん、ありがとうございましたー！続きまして、大阪基地所属・第四洋上機動戦隊による・・・』

テンポの良いアナウンスの中、俺はISを見て、複雑な思いを感じていた。

精神年齢が肉体年齢プラス20程になっているとはいえ、俺だって男の子だ。小さい頃にISを初めてテレビの画面で見てから暫くは、ひよっとして俺もあれを身に着けることが出来るんじゃないかと、淡い期待を抱いた。それが俺が男である以上は絶対に動かすことが出来ないのだと知った時は、当然ショックも受けた。

けれど、考えてみればそれでよかったのかもしれない・・・ブドウに手の届かなかった狐が、あんなものは所詮酸っぱくて食べたものではなかったんだと嘯くようではあったけど。

正直言って、これを動かす事が出来れば俺は一気に『一般人』の枠組みを飛び越えた存在になるんだろう。けどそれは同時に、俺達の身に迫る“死”がとことんまでに大きくなることを示していた。

どれだけ安全だろうが、健全なスポーツだと言い張ろうが、ISは兵器だ。そして兵器は、人殺しの道具。

もしも、男性でこれを動かす人間が現れたとしよう。女尊男卑に傾きつつあるこの世界で繰り広げられる『物語』は、おそらくこのパワードスーツを身に纏って戦う女性達のお話なのだろう。そんな中でISを動かせる男性は即ち、現在の世界のパワーバランスを崩せる男性、ということになる。俺がその『物語』に出て来る悪党ならば、これを利用しない手は無い。

解剖されて、男性をISに適合させる為の実験台にされるだろうが。悪の組織みたいな連中に拉致されて、その『物語』の主人公達と敵対するだろうか。

(・・・やめだ、やめ。俺はあくまでいち技術者になりたいんだってーの)

詮無き思考を切り捨てて、俺は目の前で繰り広げられる飛行ショーに集中する事にした。第一、さつきも言ったが男性がこれを動かせるはずが無い。俺は前世で叶えることの出来なかった技術者の夢を、今度こそ実現するんだ。

と、その時。がしゃん、という駆動音と共に、一機のIS・・・フランス製第二世代量産型IS『ラファール・リヴァイヴ』が俺達の傍に降り立った。ショーを終えた大阪基地のISだろうか。

「つとと、あれ・・・おつかしーわねー」

ISを身に付けていた女性は、なにかしらの作業をしているようだったが、それでもISが一向に動き出す気配は無い。

「あらー、参ったなあ・・・三番機でシステムトラブルです。PICが動作していないようで、帰投できません・・・了解、現場で整備班と回収班を待ちます」

通信ウィンドウ——たぶんこのショーの実行委員会とかだろう——を開き、二、三、言葉のやり取りをした女性は、そのままISを“脱ぎ”、待機状態にした機体から飛び降りると、ふーっと大きく息を吐いた。

・・・よもや、こんなトラブルで『R・リヴァイヴ』が間近で見れるとは。アリーナ席万歳。

気が付くと俺は、観客席のフェンス——急ごしらえで、俺の腰までの高さしか無かった——から身を乗り出して、食い入るようにその細部を見つめていた。

すると、愛機に視線を向ける俺に気づいたのだろうか、さっきまでその『R・リヴァイヴ』を身に着けていた女性が、柔らかに微笑みながら俺に声をかけてきた。

「君、このリヴァイヴに興味があるのかな？」

「へっ!?!・・・あ、す、すいませんジロジロ見ちゃって」

バツ悪そうに頭を掻く俺に、女性は気にしてないわよ、と微笑むとISに寄りかかって何をするでもなく、この現状を打開してくれるスタッフの到着を待ち始める。動かない『R・リヴァイヴ』が気になった俺は、恐る恐るその女性に声をかけてみた。

「あの、どうしたんですか？」

「ああいえ、ちょっとね。システムトラブルかしら。PICが動かないのよ」

「PICって、パッシブ・イナーシャル・キャンセラーですよね? ISを浮かべたり加速減速したりするのに使う・・・」

淀みなく答えた俺に、女性はキョトンとした表情を浮かべると、興味深そうに俺を覗き込んできた・・・って！近い、近い！！女の人が！女性が！？しかもなんかISスーツってなんか一昔前のスク水っぽくてなんかこう余計にえもいわれぬ悪寒がうわあああああああつ！？

「君、もしかしてIS技術者志望なの？」

「ひ！？は、はい！一応・・・」

何とか落ち着きを取り戻した俺は女性の問いに答える。すると、俺の後ろにいた男子生徒たちが面白半分に囁し立ててきた。

「佑介、見せてもらったら？」

「お前確か、志望校はIS学園の整備学科だったよな」

無責任極まりないことを言う二人に、あのな、と俺は反論しようとしたが、なんと思わぬところからその言葉は現実のものになった。

「いいわよ、別に。なんならちょっと試しに座ってみても」

言いながら女性は、『R・リヴァイヴ』のコックピット・・・装着時に体に乗せる位置を、ぽんぽんと手で叩いて見せた。

「え、良いんですか！？」

「ええ、どうせ今は壊れてるし、何より君は男の子なんだから実際に動かしたりしないでしょ？」

それもそうだ。

「・・・じゃ、じゃあ折角なんで」
「どうぞどうぞ」

やべえ、冷静を装っているけど、すごく嬉しくてドキドキする。気分はまるで、友達の持つている高級なおもちゃに触れる許可をもらった幼稚園児の気分だった・・・いや、『今回』の人生では俺も孝明^{じーさん}も玩具に興味なんか示さなかったから、あくまでそんな気分かな、っていう感じなんだけど。

内心の昂ぶりを抑えつつ、俺はフェンスを乗り越えて『R・リヴアイヴ』に近づいた。装甲の隙間に足を引っ掛けて、装着時に体を預ける場所にどっかりと座り込み・・・

『搭乗者を確認、これより再起動します』

そんなガイド文が目の前に見えて、思考が完全に固まった。

「・・・は？え、いや、ちよつ！？」

もしかして俺はとんでもないことをしてしまったのではないかという感覚が一瞬頭をよぎり・・・次に何かを考える暇もなく、ぎゅいん、と“金属”の駆動音が体の下から聞こえ——！！？

「な、うおおおおおつ！？」

パニックを起こして悲鳴を上げた俺の体が、がしゃんがしゃんと動き続ける金属に包みこまれていきなりぐん、と視界が持ち上げられてちよつと今の衝撃で胃の中の物がせり出しそうになるけど我ま、ん、を？

「・・・は？」

なんか、視線が高い。先程まで俺と同じ目線の高さだった女性の脳天が視界の下の方に見えたことから、俺の背が急激に伸びたのかと判断。とりあえず今の一瞬でどつさり嫌な汗が噴き出た頬を掻こうとして右手を動かし・・・

「ぐえ」

腕にくつついていたと思しき鉄塊が俺の頬に命中。突然の衝撃に目を白黒させ、よくよくそれを見てみるとなにやらメカメカしい掌がそこにあつた。

「・・・・・・・・」

俺が右手を動かそうと思う。すると、右腕を包んでいるこつつい

装甲が手首の辺りからキューーンと音を立てて動く。多分装甲の中では俺の生身の手首が関節の動く範囲内でぐるぐる動いているのだろう。機械の手首は、おおよそ俺が自分の手首を動かそうと考えた通りに動いた。驚いた事にスナップを効かせるなどという小技も出来る。

「・・・・・・・・」

続いて指をそれぞれ思い通りに動かしてみる。触ってみて初めて解ったが、あのごつつい筒の中には指の並びに添って五つ並んだ圧力センサーと思しきものがあるらしく、俺がそれを握りこむとその力加減をトレース、更に角度を拡大して拳の形が変わる。ぐー。ちよき。ぱー。おお、自由自在。

「・・・・・・・・」

そして、周りを見回してみる。まず、目を見開いて固まっている、今の俺の位置に本来居るべきISパイロットの女性。その後ろに、揃って口をあぐりと開けている学校の友達。見れば、周囲の視線は全て俺に集中している。いやん、そんなに視線で犯さんといて・
・失礼。馬鹿なことを考えた。

いつまでも固まっけていても仕方ないので、俺はとりあえず、率直に思ったことを口にした。

「・・・・・・・・えっと、なんで？」

『こっちの台詞だあああああああああああああああああああああああ
ああああつつつ！?!?!?!?』

『ストライク。イツチーズ』的な世界かと思いきやまさかの『けん。ファー』展開だったと俺が気付いたのは、自分が身に纏っ

るのが本来女性にしか扱えない兵器だという事を思い出したおおよそ数十分後だった。

・・・一応、俺が女になっちゃうとか、そういう事態は発生しませんでした。超安心した。

この日。日本のどこかでお昼のよるめきドラマを臨時ニュースに中断させられた無職の男が酒を飲んでくだを巻き。出番を打ち切られたワイドショーのコメンテーターがスタッフに文句を垂れ。テレビを見て騒ぐ後輩に叩き起こされたお昼寝中のお局OLが後輩イジメを考え——それらは全て、予想を超える驚愕によって打ち消される。

『緊急速報！都内で修学旅行中の男子中学生 インフィニット・ストラトスを起動させる！』

伸ばしたその手に触れたブドウは、果たして甘いか酸っぱいか。そして少年とその親友は、その果実の味を感じることの出来る『物語の中の自分』にいつ気付くのか。

今はまだ、誰にもわからない。
今はまだ、何もわからない。

第三話：これより、物語は動き出す（後書き）

はい、やらかしました原作ブレイク。一夏に先んじて『人類初の男性IS操縦者』になつてしまつた佑介の明日はどっちだ！？

ISの手首の操作つてどうやってるんでしょね。本作品では『マクロスF』に登場した『EXギア』に似たようなもんだろつかと位置付けてこんな描写にして、尚且つマクロス繋がりでデモンストレーション飛行を入れてみました。・・・はてさて読者の皆様の反応や如何に。

あと、飛行ショーで出てきた五機の青い打鉄は完っ全にブルーインパルスへのオマージュですw

「IS学園に男子生徒が居ない理由」

技術者も育成しているはずなのに100パーセント女子高つておかしくね？と思ひ捏造。

IS学園は一応どの国にも所属しない永世中立機関であり、決して男性と女性のどちらかに味方する組織でもないの、建前上は共学である。学科も「操縦学科」「整備技術学科」の二つに分かれており、一夏達が所属しているのは操縦学科。学園ではISの技術者も育成しており、そちらの方には男子生徒がわんさか居る。整備技術学科は外部から講師を頻繁に招いたり大きな工廠が必要だったりする為に内陸側に作られており、操縦学科はISの運用の為の敷地（最悪、暴走しても一般人に被害が出ないためのスペース）と、アスリート育成の環境が必要な為に東京湾の島を開発してそこに作られている。

言つてしまえば操縦学科はまるまる“危険物”として隔離されているのだが、『IS操縦者』偉い』という間違つた認識の為に操縦学科のある本校舎はIS操縦者の聖地として特別視され、間違つたエリート意識に繋がっている。

尚、操縦学科に所属する生徒のうち数名は整備技術学科を中学課程で卒業後、操縦学科に編入学している。

・・・大丈夫かな、こんなのやっちゃって。

12 / 13 誤字を修正、あとがきの内容を追加しました。

第四話：皮算用と家族の絆。そして、全国一斉検査（前書き）

こんばんは。もしくは超お早うございます。

今回のセカンド・ライフは

・ちょっと孝明が壊れました。あなたきつと疲れているのよ・・・

・その頃の佑介。

・また超^{おまえ}展開か。

の三本でお送りいたします。

第四話：皮算用と家族の絆。そして、全国一斉検査

結論から言おう！佑介が一時的に政府預かりの身になった為に飯岡家は東京に引越しました！わあい何この急展開！

・・・はい、すみません。私かなり取り乱しておりました。ええもう大丈夫です、トランクライザーがありますので・・・え？最近の若い人はトランクライザーなんて知らない？そうなの？（現在は抗不安薬と呼ばれ、トランクライザーという呼称は一般的ではありません）

あの後、修学旅行は急遽中止され、私たちは三日目に行く予定だった某有名テーマパークに足を踏み入れる事無く生まれ育った東北の地へと戻ってきた・・・騒ぎを聞きつけてやってきた黒服の大人達に連れ去られた佑介を東京に残して。

連れ去られたと言っても、決して佑介の意思を無視して拉致したわけではない。宿泊先のホテルの一室で教員の立会いのもと様々な説明を受けた佑介は、国家公安委員会を名乗る黒服達に逆らうことなく彼らのもとへ向かったそうだ。あの男のことだから、身の安全を再三にわたって確認したうえで付いて行っただろう。公安の保護を受けるといふのなら、日本においてはこれ以上に安全な場所はない筈だ。

「『物語には否応なく巻き込まれる』・・・こういうことか」

自室の机に肘をついた私は大きく息を吐く。窓の外に視線を向け
れば、灯りの消えた飯岡家が電灯の光を浴びて夜の闇の中にぼんや
りと佇んでいた。

おそらく佑介は、『物語』の登場人物になった。これから彼は『
物語』の登場人物と接触することになるのだろう。友人となるか、
敵となるのかは分からないが。

だが、私一人が指をくわえてそれを見ている訳にもいかない。佑
介がどう思っているかは知らんが、私にとって佑介はこの世界で最
大の味方であり、文字通り私の『全て』を知っている大事な友人だ。
叶うのならば助けてやりたい。

「その為には・・・」

机の上に視線を移せば、今日の午後、書店で買ってきた本の山。

『IS入門 初級者編』

『図解でわかる！ インフィニット・ストラトス』

『目指せモンド・グロツソ！ 元日本代表候補生に学ぶ、スーパー
訓練法』

それらは全て、ISに初めて触れる人を対象にした入門書だった。
・入門と言っても、そこはそれ、やはり専門書。わずか三冊で五
千円飛ぶとは思っていなかった。

佑介がISに携わる者としてこれから『物語』に入り込むのなら、
それを助ける立場に立とうとする以上ISの知識は必要になる。

そして、淡い希望もあった。

——佑介が動かせたのなら、私にも動かせるのではないか？

それに気付いたのは、書店での店員との会話。初め、こういった“女性向け”の本（変な意味に非ず）を買うことに僅かばかりの抵抗があった私は、目的の本棚を見つけてそこに売っていた本をぱらぱらとめくって流し読みをするだけで、なかなかレジに持つていくことが出来なかった。

ところが、私の後からIS専門誌のコーナーに足を踏み入れた男性が、適当に二、三冊ほどそこにあった本を手にとったかと思うと迷うことなくレジに持つて行ったのだ。これには驚いた。

その後、私は流し読みしていた本を纏めて、レジに持つていく。どうしても気になって、レジスターを打っていた男性店員に聞いてみたのだ。

「あの、俺の前にISの本を買って行った人が居たみたいなんですけど」

「ん？ああ、さっきのお客様ですね」

やっぱり気になりますよね、と彼はつぶやくと、手早く私が買った本を紙袋に詰めながらこう言った。

「ここ数日、IS関連の本が飛ぶように売れてるんですよ。なんでも、もしかしたら自分もISが動かせるかもしれないって」

店員が言うには、史上初の男性IS操縦者・飯岡佑介のニュースが世間を騒がせてからこつち、『同じ人間の男に出来たのなら自分に出来ないはずがない』と、IS操縦者の入門書を手にして、『輝かしい未来』を夢見る者が後を絶たないのだそうだ。

言われて私ははっとした。まだ可能性の話だが、私もISが動かせる可能性がある。それも、私は明確に、おそらくは佑介と同じ理由で。

そうだ、佑介が動かすことが出来たのなら、彼と同じく“物語に巻き込まれることを予告された”私とて、同じことが出来るかもしれないのだ。

皮算用と言ってしまえばそれまでだが、知識を取り入れておくに越したことはない。

「・・・さて。取らぬ狸の、と言っが、果たして狸は出てきてくれるかな」

自室のベッドに寝転び、買ってきた本を開く。今日は遅くなりそうだ。

住み慣れた一軒家を手放して、俺と、俺の両親が目黒区のマンションで寝泊りするようになって、早一週間。朝起きたら見慣れない天井が見える生活はなかなか慣れず、ここ最近は母さんが体調を崩しがちだった。

要人保護プログラムだかなんだかで仕事をしなくても一定の収入を得られるようになった父さんが代わって家事をしているし、俺も手伝っているから我が家の台所は今のところ普段と変わらない。

「佑介、こっちの皿は出来上がりだからテーブルに出してくれ」

「はいよー・・・うげ、また大根の煮物かよ」

「煮物は良いぞ。油を使わず栄養満点、何より作るのが楽だ」

「俺が昔大根食って腹壊したの覚えててやってるだろ」

さあて知らんなあ、と笑う親父。殆ど監禁されているようなものののに、この人はめげない。初日に俺たちのここでの生活を説明しに来た公安の人達相手に『最低限の趣味や買い物だけはさせてもらう、私達一家は人間なのだから』という意見を押し通した胆力は伊達ではないらしい。冷や汗を掻いた公安の人を追いつ返してすぐ、不安に震える母さんを優しく宥め、俺を励ましてくれた親父は、強い人だった。

「それより、そろそろおじやが出来るから母さんのところに持って行ってくれるか」

「わあーった」

軽く返事をして、俺はコンロの火を止める。その上にあつた土鍋を鍋つかみと布巾で持ち上げると、鍋式を敷いたお盆に載せる。箸とレンゲと小さいお玉、おじやを盛って食べる用の母さんの茶碗、最後に小皿に載せた梅干しをひとまとめにすると、廊下を通って母

さんのところへ・・・父さんと母さんの寝室へ向かった。

「母さん、メシ出来たから持ってきたよー」

ノックをして、中から返事。俺は片手で盆を持つと、ドアノブを捻って中に入った。母さんはベッドの上に体を横たえ、上体だけを起こして俺を迎えた。

生まれ変わってからしばらくは相手が女性と言っただけで近づくことが出来ず、近づけば形容しがたい悪寒に襲われて泣いたり悲鳴を上げたりしていた俺だが、一緒に暮らす家族には、この十四年でいい加減に慣れた。

相変わらず家族以外の女の人に触れたりすることは出来ない俺だが、母さんと会話するのにはなんの苦痛も無くなっていた。

「ありがとうね、佑介」

「良いつて・・・ほとんど俺のせいなんだから」

ぼそぼそと言って、俺は母さんの前におじやを盛った茶碗を差し出した。母さんは俺から茶碗を受け取るとレンジで掬って、ふう、と冷ましたあと、しっかりと食べた。

「ん、おいし」

「そりゃ良かった。父さんが張り切って作ってたから」

母さんの体調はだいぶ良くなっている。昨日は碌に飯も喉を通らなかつたようだが、今日は朝もちゃんと食べたし、昼食も食べれている。

「じゃ、食い終わったら回収にくるから、食べててね。俺も自分のメシ食って・・・」

「佑介」

自分の昼食を食べる為に居間へ戻ろうとした俺を、母さんが呼び止めた。何事だろうかと振り返ると、母さんは俺をベッドの近くに招き寄せた。

「母さんが身体を壊しちゃったのは、急に東京に来てびっくりしちゃったからよ。決して佑介のせいなんかじゃないわ」

「・・・それは」

「佑介がISを動かしちゃったのだって、偶然なんですよ？」

「・・・まあ、うん」

じゃあ気にしちゃ駄目よ、と母さんは微笑んで、俺に言った。

「それにね、お父さんもお母さんも、嬉しいのよ」

「嬉しい？」

「ええ、佑介と一緒に悩むことが出来て」

母さんは笑いながら、昔を懐かしむような表情を浮かべた。

「佑介ってば、夜泣きもしないしトイレもすぐに一人で行けるようになったし、本当に手のかからない子供だったのよ」

「う、そういう話は勘弁してくれよ・・・」

やばい、一番やめて欲しい話だ。生まれたばかりの頃、通常の赤ん坊と違ってある程度人格が形成されていた俺達だけど、如何せん脳の中に眠っていたそれが、体の幼さに耐えきれず常に寝ぼけている状態だったんだ。孝明が言うには脳の成長が俺たちの性格に追いつくまで時間がかかったということだったけど、早い話が俺達は、生まれたばかりで満足に歩くことが出来ず、食事も下の世話も人任

せにしていたころの記憶が、人よりも鮮明に残っていた。

俺の心中を知ってか知らずか、母さんはけらけらと笑って話を続けた。

「佑介が幼稚園に行くようになってからは、おかげで私もまた働くことが出来て楽しかった。けどね、やっぱり私達は自分が子供を育てているんだっていう実感が無かったのよ。あんまりにも佑介がお利口さんだったから」

言って、母さんは俺の頭を撫でた。

「だから、佑介が悩んで、私達を巻き込んでくれたのがとても嬉しいわ。私達は、佑介に家族として頼ってもらえる。こんなに嬉しいこと、滅多にないわよ」

そう言いながら俺を撫で続ける母さんは、本当に楽しそうでした。

俺は、前世の自分がどうのこうのと考え続けていた自分が、無性に馬鹿馬鹿しく思えた。

やがて、こんこん、とノックの音が聞こえた。両手がふさがっているから開けてくれー、という父さんの声に応じてドアを開けると右手に昼食の乗った盆を、左手に前の家で使っていたちゃぶ台を持って立つ父さんが居た。

「なにしてんの、父さん」

「考えてみたら風邪でもないのにわざわざ別の部屋で食べるのがアホらしくなつてな。折角だしみんなで食べよう」

父さんはなんでもなさそうに言うと、ちゃぶ台を寝室の中央に広げてその上に料理を並べ始めた。

それを見て、母さんはまた、くす、と笑った。

「ほら佑介、さっさと座ってとつとと食べる」

「佑介、お母さんにそっちの煮物も頂戴・・・あら」

そして、俺は。

「・・・こんなことで泣くな、ばかもん」

「つく、泣いて、ないし、えく・・・」

もう一度、生きる。それを聞かされた時は、ただ怖かった。いつかまた、望まぬ死が俺の身に降りかかるんじゃないかと。

けれど。生まれてきて良かった。この人たちに出会えて、この人たちの家族になれて良かった。

頬を伝う涙が暖かくて、俺はただ、嗚咽を押し殺していた。

それから二ヶ月後。全国の中学三年生の男子を対象に、ISの起動検査が行われることになる。発案は俺だった。

これから俺は、世界初の男性IS操縦者として政府の保護を受ける。それは、俺の身柄を狙って良からぬ事を考える連中が居る、という意味で。当然、矛先は俺の家族にも及ぶだろう。味方の確保と危険の分散。後から考えてみれば自分でも反吐が出るような打算でいて、俺は公安の人に言った。俺以外にISを動かせる男が居ない

か、検査してみたらどうですか、と。

自分の家族の平穏と、見知らぬ誰かの一家の平穏。二つを天秤にかけてから、俺は心の中で、見知らぬ人たちに詫びた。

（—— I S を使える男が俺一人なら、俺の家族は危険に晒される。けど、俺以外にも I S を使える男が現れれば、俺の家族への危険は少しでも減る。俺は、自分の家族のために“みんな”を巻き込む・・
・ごめん）

まだ見ぬ俺の“仲間”^{おせこ}へ、そして、おそらくこの検査に引つかかるであろう幼馴染の少年へ、俺はただただ、声に出さずに謝り続けた。

七月の半ば。例年であればもうすぐ夏休みだ、と浮かっていた時期であるにも関わらず、三年二組の空気はどこかピリピリとしていた。

「な、なあ。今日の放課後だよな、ISの適性検査って」

「動かせちゃったらどうするよ？IS学園に入学することになるんだよなー」

前の席で楽しそうに話す男子生徒二人。いわゆる“ちゅうにびょう”から抜け出し切れていない彼らにとっては、今日が人生の転機となる予定なのだろう。気持ちはわからなくてもないが。

彼らには悪いが、たぶん私は確実にISに適合する。佑介と同じく前世の記憶を持って生まれたから、という馬鹿馬鹿しい理由ではあるが、この際何でもいい。

私が佑介と同じ位置に立てないといけないのだ。

「なあなあ孝明。やっぱお前も、IS動かせれば良いよな」

「ああ。できればやってみたいな」

出来れば、では困るのだが。この二か月、自分なりにISを勉強してみた。本当は佑介が使っていたノートなどあれば良かったのだが、残念ながら引越しの際、彼の私物は徹底的に回収されていた。公安は、よほど佑介の個人情報情報を漏らすわけにはいかないらしい。独学では出来ることにも限界があったが、やらないよりはマシだろう。

「だよなあ。なんてったってIS学園に入れば、女の子ばかりだし。きっと天国なんだろうなあ」

「ああ、佑介がうらやましいぜちくしょう」

・・・この危機感のなさは、若さゆえのものだろうか。それとも、彼らのおつむが少しばかり足りていないのか・・・

「まあ、結果は見てみないと分からないんじゃないのか？」

「あ、くそつ、余裕かましやがって俺だつて——」

「浮かれるのはいいけど、動かしてから浮かれたら？」

突如、会話に入り込んできた女子の声に、俺たちの意識はそちらに移った。

「委員長じゃんか・・・おーおー、もう動かせるのが決まってる人は良いですねー」

「別に関係ないわよ、もうすぐ先生来るから静かにしてって言ってるの」

委員長、と呼ばれた女生徒は、男子生徒の嫌味な口調をもととせずにぴしゃりと言いつつ。彼女は呼ばれたその名の通り、私達三年二組のクラス委員を務めていた。又聞きで聞いた話だが、小学生のころからISの訓練を受けていて、受験の進路も既にIS学園を受験することで決定しているらしい。

「三上君、ずいぶん余裕みたいね。佑介君が動かしたんだから三上君もやりたがると思ったんだけど」

「出来れば動かしてみたいが、出来るかどうかがそもそも判らんかな。もう動かしたつもりで騒いでたら滑稽だろう」

私の言葉に、滑稽な騒ぎ方をしていた二人がバツ悪そうに明後日の方向を向いた。

「ふうん・・・相変わらず、おじいちゃんみたいな言い方するのね」

「やかましいわ」

何がしたかったのか、委員長は嫌味だけを残して去って行った。
・ただ、すこし話し方に気を付けた方が良さだろうか、と思ったが。

放課後になって、私達は体育館に連れて行かれる。そこで私達を待っていたのは、武骨な鉄の塊。二ヶ月で付けた知識が間違っていないければ、それは日本製の量産型IS『打鉄』だった。

「では、一組の人から順番に・・・」

検査に立ち会う研究者だか自衛官だかの説明を聞き流しながら、私は自分の順番を待った。

「・・・はい、もう良いですよ」

「え・・・あ、あのっ！もうちょっと・・・」

「はいはい、時間が押してるからごめんね」

「あー・・・」

私の前では、適合検査で弾かれた一組の生徒たちがため息とともに、肩を落としながら歩いていく姿が見えた。

「な、なんか難しいみたいだな」

「っていつか、今のところ一人もないんじゃないか・・・」

休み時間に騒いでいた男子二人は、だんだんと自分の番が近づく

に連れて落ち着きを失くしていった。

「はい、終わりです。残念だったわねー」

「えー、ちくしょう」

「動かせると思ったのになあ・・・」

そして、その二人もむなしくとぼとぼ後ろの方に歩いていき・

「次、二十五番の三上 孝明くん」

「——はい」

私の番が来た。

「踏み台に上ってから、ここに座って」

「・・・・・・」

係員の指示に従って、『打鉄』の頂部に腰掛ける。ゆっくりと息を吐き、目を閉じる。途端に、何かが私の体を包み込み・・・

「——っ！？来ました！！」

「なにっ！？」

研究者達の怒鳴り声に、周囲のざわめき。

次に私が目を開いた時、私の視線は普段よりも高い位置にあった。自分の体を見下ろせば、戦国時代の鎧武者を髭髯とさせる、銀色の鎧。右手を目の前に持つてくると、そこにあったのは、尖った指が特徴的な、攻撃的な機械の掌。

「適合例、出ました！三年一組 三上孝明！二人目のIS操縦者で

す!!」

「記録はあるか!? すぐに開発部に回せ!」

一瞬にして喧騒に包まれた体育館の中。ひょっとして、高校でも委員長と同級生になるのだろうか、と思い当たった私は、委員長、と周りに呼ばれ続ける彼女のフルネームはなんだっただろうかと、阿呆なことを考えていた。

第四話：皮算用と家族の絆。そして、全国一斉検査（後書き）

ようやくとオリ主が二人とも物語に関わり始めました。ちょっと駆け足だったかと思いますが、これで日常編は一度終了です。最後にちらつと出てきた委員長は原作編で出すかどうかは不明です。んならアニメで出てきたキャラクターの名前を使ってしまうとか、それとも“IS学園の入試に落ちた女子”にしてみようか。さあどうしよう、ぐふふ。

「おまけ：没ネタ（冒頭のネタ）」

孝明「ええもう大丈夫です。トランクライザーがありますので・・・おい誰かー。ホットドガーの皆さん呼んできてー・・・ん？なんか電波が混線したな・・・（ぶつぶつ）」

孝明父「・・・息子よ。何があったのかは聞かないから、速やかに寝ろ。明日も学校だろう、ゆっくり休んで（頭の）疲れを取りなさい」

某PCゲームにトランクライザーっていうロボットが出てくると学校の先輩から聞いて。トランクライザー違いなので没。

次回。彼にとってのプロローグ。

次回、やっと原作キャラクターのエピソードです。またしても原作を無視した設定と描写がちらほら。いやー、石投げないでー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9368y/>

IS インフィニット・ストラトス/セカンド・ライフ

2011年12月17日04時02分発行